

**有毒!**  
ゆうどく  
**注意!**  
ちゅうい



# 危険植物 きけんしょくぶつだいずかん 大図鑑



保谷彰彦 写真・文



けつえき おく  
血液を送るリズムをみだす！

しん ぞう どく  
**心臓毒**



スズランの赤い果実は食べると危険。

わたしたちの心臓は一定のリズムでドクドクと動きます。そして体のすみずみまで血液を送り出します。ここで紹介する植物には、心臓のリズムをみだす成分がふくまれています。これらの成分を「心臓毒」といい、いろいろな種類が知られています。代表的な心臓毒には、強心配糖体という化合物や、トリカブトやイチイなどにふくまれるアルカロイドなどがあります。

**スズラン**

キジカクシ科スズラン属

高さ・生活のしかた：20~35cm 多年草

開花期：4~6月

分布：北海道、本州中部以北



有毒部位と成分



強心配糖体 (コンバラトキシン、コンバラサイド)

強心配糖体をふくむ植物は、世界中の熱帯や温帯地域に広く分布しています。たとえば、キジカクシ科、キンポウゲ科、キョウチクトウ科などです。観賞用のドイツスズランにも強心配糖体がふくまれます。中毒症状は嘔吐、頭痛、心不全など。スズランをさしたコップの水に強心配糖体がしみ出し、その水を飲んだ子どもが亡くなったという報告があります。スズランの葉は食用にされるギョウジャニンニク (p30) の葉と似ているので注意しましょう。



ギョウジャニンニクとまちがえられることが多いスズランの葉。

最悪のケース

死の危険



活けた水も毒になる！

るい  
**トリカブト類**

キンポウゲ科トリカスト属

高さ・生活のしかた：0.5~2m 多年草

開花期：8~10月

分布：北海道、本州、四国、九州



有毒部位と成分



トリカストアルカロイド (アコニチンなど)



最悪のケース

死の危険

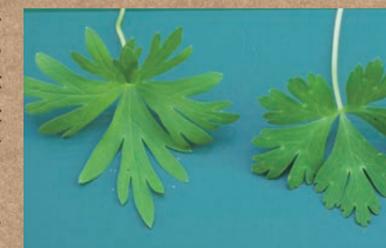
心臓の動きを妨害する！

オクトリカブトの花。

日本には30種ほどのトリカブトが分布しています。有毒なトリカブトアルカロイドは、心臓のリズムをつかさどる神経の働きをさまたげます。このアルカロイドには、いくつかの化合物がありますが、特に毒性が強いのはアコニチンです。2009年には、イギリスでトリカブトの粉末を混ぜたカレーで殺人事件が起きています。被害者の男性は10分でお腹の中に刺すような痛みが現れ、痛みはしびれに変わり、数時間で不整脈と呼吸困難になり、心臓のリズムがみだれて死亡しました。一方で、トリカブトは漢方薬として関節炎やぜんそく、胃腸炎などの治療などに利用されてきました。毒にも薬にもなるというわけです。

若い葉を山菜とまちがえる危険

トリカブトの若い葉は、山菜のニリンソウ (p64) やモミジガサなどの葉と似ています。そのため、まちがえて食べてしまう事故がよく起こります。自信がない場合は食べないようにしましょう。もしニリンソウの葉を食べるなら、花が咲いたものを探るようにするのが確実です。花を見れば、トリカブトとニリンソウをまちがえることはなからずです。なお、山菜として利用されるニリンソウも有毒とされます。



トリカブト類の葉 (左) とニリンソウの葉 (右)。

するどくとがった物質で身を守る

# サトイモ科



スパティフィラムの花。

シュウ酸カルシウムの結晶をもつ種が多く見られます。この結晶がするどくとがった形の場合、生のまま口にとると口内や喉がヒリヒリし、多量だと消化器の障害や呼吸困難を起こし、ひどい場合には死に至ることがあります。サトイモ科にはサトイモなど食用にされる植物があります。その食用部分にもとがった結晶がふくまれますが、ゆでるなどすれば食べられるようになります。

## スパティフィラム

有毒部位と成分



シュウ酸カルシウムの針状結晶

スパティフィラム属

高さ・生活のしかた：30cm 多年草

開花期：5～10月

原産地：熱帯アメリカ



原産地である熱帯アメリカにはスパティフィラムの仲間が40種ほど分布し、日本では複数の種が栽培されます。花茎の先にたくさんの小さな花が並びます。白い部分は仏炎苞という特殊な葉。汁液がつくと皮膚炎を、口にすると口内のただれ、声のかすれ、一時的な言語障害、食べ物を飲みこめなくなるなどの症状を起こすことがあります。口に入れてしまったときには水や牛乳を口にふくんで洗います。汁液が手についたときには石けんでよく洗い、目に入ったときは流水で洗浄します。



スパティフィラムの花序はこん棒のような形をしている。



最悪のケース

皮膚炎

人気の園芸種も汁液の毒は強烈！

## ミズバショウ

有毒部位と成分



シュウ酸カルシウムの針状結晶、根茎にアルカロイド

ミズバショウ属

高さ・生活のしかた：10～30cm 多年草

開花期：5～7月

分布：北海道、本州中部地方以北



最悪のケース

心臓まひ

クマが食べても人は食べてはいけない！



開花中のミズバショウの花。



花が終わると葉が巨大になる。

根茎は太く、嫌なにおいがあります。花のような白い部分は仏炎苞という特殊な葉です。仏炎苞に包まれるように、花序の花が咲きます。花序につく小さな花の直径は3～4mm。1つ1つの花に雄しべが4本、雌しべが1本あります。花が咲き終わると、葉がぐんぐん成長して、高さ80cm、幅30cmほどの大きさになります。葉などにはシュウ酸カルシウムの針状結晶がふくまれるため、皮膚につくと、かゆみや水ぶくれなどを起こすことがあります。中毒症状は吐き気や脈拍の低下、ひどいときには呼吸困難や心臓まひなどの危険性があります。ツキノワグマはミズバショウを食べるといわれますが、わたしたちは食べないように注意しましょう。

熱で雪をとくす!?

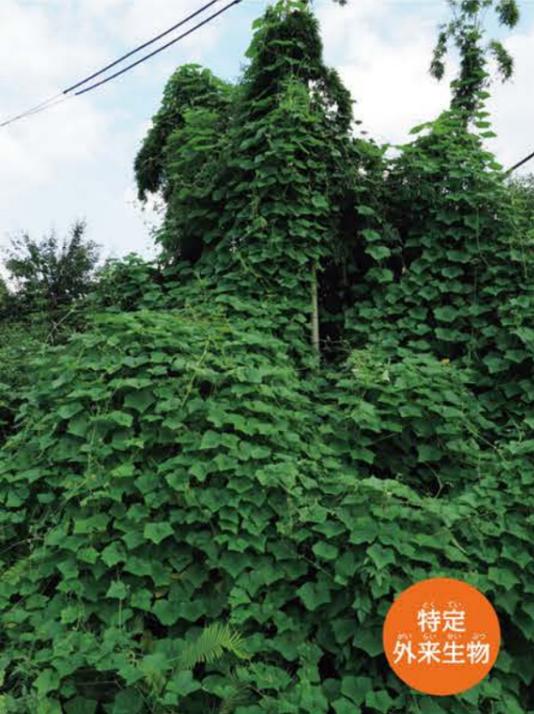
ザゼンソウ

湿地に生えます。仏炎苞は厚く、暗紫褐色。花期は3～5月で、まだ雪が残っていることも。ところが仏炎苞に包まれた花序では熱が発生しているため、周囲の雪がとけていくことがあります。植物の発熱はめずらしい現象



ザゼンソウの花。

です。さてザゼンソウは全草にシュウ酸カルシウムをふくみ、汁液にふれると、発赤や発疹など皮膚炎を起こします。口にすると嘔吐や下痢、呼吸困難、心臓まひなどを起こす危険性があります。



## アレチウリ

ウリ科 茎の長さ：数m～数十m

◀北アメリカ原産のつる植物で1年草。輸入ダイズにまぎれて種子が持ちこまれ、ダイズをアツク豆腐屋から広がったといわれます。河川敷や飼料畑などで、ほかの植物をおおいつくすように生えています。おおわれた在来植物が絶滅してしまうこともあります。

特定  
外来生物

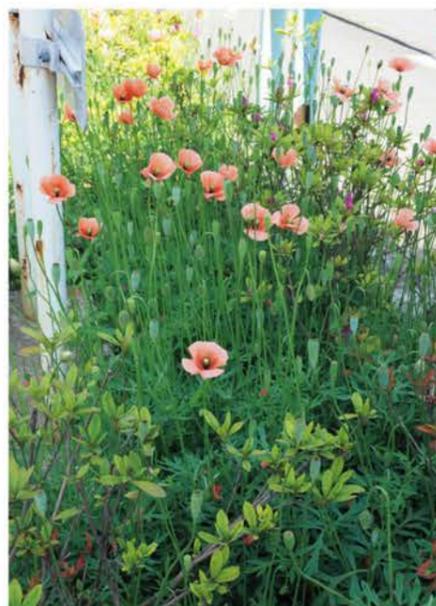
## 生態系に被害をあたえる外来植物

## ナガミヒナゲシ

ケシ科

高さ：20～60cm

◀原産地は地中海沿岸。観賞用に持ちこまれました。1961年に東京で野生化していることが確認され、近年では日本全国に広がっています。近縁なヒナゲシ(p57)とは果実の形がことなります。果実の中にできる、たくさんの小さな種子が、どんどん散らばっていきます。



夏から秋に、小さな花が咲く。左が雄花で、右が雌花。

## ヤセウツボ

ハマウツボ科 高さ：20～50cm

▼ヨーロッパ～北アフリカ原産。1937年に日本に入りこんでいることがわかりました。マメ科、セリ科、キク科などの植物の根に寄生して栄養を横取りします。在来タンポポにも寄生するやっかい者です。アフリカなどではマメ科の作物に寄生して、被害をあたえています。



## 雑種タンポポ

キク科 高さ：10～20cm

▲ヨーロッパ原産のセイヨウタンポポは、野菜として持ちこまれたといわれます。その後、在来タンポポと交雑し、近年では雑種タンポポが日本各地に広がっています。最近の研究では、セイヨウタンポポや雑種タンポポの花粉が、在来タンポポの雌しべにつくと種子ができにくくなることがわかってきました。

# 毒をもつ外来植物

外来植物の中には、中毒やアレルギーの原因になるなど、人に直接的な被害をおよぼすものがあります。たとえばオオナモミやタマスダレ、ヨウシュヤマゴボウなどです。ほかにも、有毒な外来植物はたくさん知られています。

## キシヨウブ

アヤメ科

高さ：1.5m

◀ヨーロッパ～中近東原産の多年草。明治時代に観賞用に持ちこまれました。現在では湖や川岸、かわいた草地など、あちこちで野生化しています。在来植物の生育地をうばう、在来のアヤメ類と交雑するといった影響が出ています。またアヤメ類(p87)と同様の有毒成分をふくみます。



## ハリエンジュ

(ニセアカシア)

マメ科

高さ：25m

◀北アメリカ原産。庭木や街路樹、ハチミツ用の蜜などに利用するため持ちこまれました。繁殖力が強く、土壌の性質を変えてしまうため、とくに河川敷などではやっかいです。ひどい場合には、在来植物は消失し、景色ががらりと変化してしまいます。ハチミツは安全ですし、花は食用に利用されることもあります。が、葉や果実、樹皮などは有毒です。



## シチヘンゲ(ランタナ)

クマツツラ科 高さ：1～2m

▲熱帯アメリカ原産。花の色が変化するのでシチヘンゲという名がつけられています。江戸時代末期に観賞用に持ちこまれました。おもに小笠原諸島や沖縄などで野生化しています。海外でも分布が広がり問題になっています。葉や未熟な果実、種子に有毒成分がふくまれます。中毒症状は激しい嘔吐や下痢など。



## ワルナスビ

ナス科 高さ：40～70cm

◀北アメリカ原産。牧草にまぎれて、気がつかないうちに日本に入りこんでいました。繁殖力がとても強く、短くちぎれた根からも葉や茎を出します。そのため畑などに入りこむと、駆除できずにやっかいです。葉や茎にするとイトゲがあり、さらに有毒成分としてアルカロイドのソラニン(p32)をふくむので注意が必要です。

## セイタカアワダチソウ

キク科 高さ：1～2.5m

◀北アメリカ原産。観賞用に明治時代に持ちこまれました。道ばたや河川敷、土手、野原などで大群落を作り、まわりの植物の成長をおさえる化合物を分泌します。ススキやヨシなどの在来植物の生育場所をうばいます。全草、とくに根に有毒成分をふくみ、家畜がこの植物をたくさん食べて死亡したという報告があります。



## オオブタクサ

キク科 高さ：3m

▲北アメリカ原産。秋になると大量の花粉が散布されます。その花粉はアレルギーの原因となり、花粉症を引き起こします。この植物が河川敷で増えると、そこに生えている在来植物が減少するという報告があります。近年ブタクサハムシによる被害を受けて、オオブタクサが減少しているともいわれています。